考え抜いてきたであろう思考がうかがえる。

本書は、テーマが1つに収斂されていないが、それは、著者が長年追いかけてきたことが複層的であったことによるのだろう。著者には、各テーマや各部の議論の関連は、自明なのかもしれない。しかし、読者にとっては、それぞれのテーマ、各部各単元の議論について、単体の論理展開は理解できても、それらがどのように有機的に関連し、全体として超高齢社会へのオルタナティブなアプローチを提示するものなのか、わかりにくいようにも思われた。そこが序章と総括の部分でより明確にされることで、「非営利という観点をとりいれた、オルタナティブな超高齢社会論」としての本書のオリジナリティが、より説得的に読者に伝わるのではないか。

著者は、「それでよいのだろうか」と問いかけ、読者に批判的思考を喚起する。しかも、(評者であれば)「それが問題だ、課題だ」という地平で思考停止しがちな議論を、2歩3歩と押し進める。本書は、幅広い学びを自らの問題意識と融合させて課題を深堀りしていく知的思考とはどういうものか、という点においても示唆的な良書である。

神原文子 著

『子づれシングルの社会学——貧困、被差別、生きづらさ』

(晃洋書房, 2020年, A5判, 356頁, 4,200円+税)

阿 部 彩

(東京都立大学人文社会学部教授)

本書は、「子づれシングル」の生きづらさを、公的統計の詳細な分析とインタビュー調査から描き出し、「生きづらさ」の理論化を試みるものである。筆者は、日本のひとり親研究を代表する研究者であり、「あとがき」によると、本書は、『『子づれシングル』3部作の完成』(331頁)にあたる。1部と2部は、『子づれシングル——ひとり親家族の自立と社会的支援』『子づれシングルと子どもたち——ひとり親家族で育つ子どもたちの生活実態』である。10年以上の歳月を費やして研究され、執筆されたこの3部作は間違いなく、日本のひとり親研究の歴史に残る労作である。

本書を含め3部作のなによりも大きな貢献は「子づれシングル」という言葉を生み出したことであろう。「母子(世帯)」「ひとり親(世帯)」といったラベルは、世の中に広く浸透しており、行政にも用いられているが、「母子」「ひとり親」と「子づれシングル」では着目点がまったく異なる。「子づれシングル」とは、筆者の定義によると「子どもを養育しているシングルの一生活者」である。「母子」や「ひとり親」が、あくまでも当事者を「親」という役割に縛り付けているのに対し、

「子づれシングル」はひとり親世帯の母親・父親を1人の「生活者」として扱う。それは、彼女／彼らに寄り添い、彼女／彼らの立場から彼女／彼らの「生きづらさ」をみつめてきたからこそ出てくる言葉であり、データばかり見ている評者は1人の研究者として深い尊敬の念を抱く。

本書は、3つの部で構成される。第Ⅰ部は「子づれシングルと子どもの貧困」と題され、公的な雇用統計などを用いて女性（1章）、特に子づれシングル（2章）の経済状況を描写し、3章において子どもの貧困に対する支援システムを提示する。正直なところ、ひとり親世帯や子どもの貧困についての文献を読み込んでいる者にとっては、第Ⅰ部は新鮮味が欠けるであろう。しかし、これらの状況に詳しくない読者には、その先を読み続けるために欠かせない知識なのでぜひ熟読していただきたい。

評者が最も興味深く感じたのは第Ⅱ部である。4章と5章は「被差別部落の子づれシングル女性」と題し、筆者らが各地の部落解放同盟と協力して行った調査をもとに執筆されており、厚生労働省の「平成23年度全国母子世帯等実態調査」との比較も行っている。また、6章、7章ではアンケートとインタビュー調査を用いて、子づれシングルということと、被差別部落出身であるということの2つの差別の「重複差別」（144頁）の実態を明らかにしている。従来のひとり親研究においては、ひとり親に対する社会からの差別についての言及はあるものの、それを詳しく分析したものは評者の知る限り筆者の研究しかない。本書では、そこにさらに「被差別」という差別が加わったときの、差別と差別のダイナミックな相互作用が明らかにされている。

第Ⅲ部は「子づれシングル女性の生きづらさ」と題してあり、「生きづらさ」の計量的測定の試み（9章）と、インタビュー調査による離婚前と離婚後の「生きづらさ」の解明である。この部は、評者も本書を手にとったときから一番気になっていた個所であった。なぜなら、既存のひとり親研究においては、ひとり親世帯の貧困や生活困難、そこから派生する子どもの学歴達成など経済問題に焦点があたりがちであるからである。そこを「子づれシングル女性」として捉え直したとき、異なる「生きづらさ」もみえてくるのではと期待していた。例えば、欧米においては「子づれシングル」であっても、異性（または同性）と交際することは当たり前であるし、日本の「子づれシングル」であっても再婚などを考える人もいるであろう。また、子どもが成長した後の自分の生きがいやキャリアなどについても、老後の金銭問題ということだけではなく、さまざまな考えをもっているであろう。これらは、ふたり親世帯の母親であっても抱えている悩みであり、ふたり親世帯の母親のほうが、ひとり親より状況がよいと一概にいえるものではない。それでは、両者はどのように違い、どこが同じなのか。

結果として、このような「生きづらさ」の側面は、アンケート調査でもインタビュー調査でも十分に抽出されていない。「生きづらさ」の計量的測定は興味深いが、「生きづらさ」の因子として抽出された絶望感、疲弊感、重圧感のどれも生活費の

悩みや経済状況の変化によって説明されるところが大きかった。インタビュー調査にしても、離婚前に比べた離婚後の解放感や離婚後に起業し成功した事例なども紹介されているが、「親」ではなく、女性としての「生きづらさ」といった点についての言及は少ない。逆にいえば、本書が示したのは彼女たちの「生」がいかに「親」として生活することに集約されてしまっているという現実なのである。

【文献】

神原文子, 2010, 『子づれシングル——ひとり親家族の自立と社会的支援』明石書店。

——, 2014, 『子づれシングルと子どもたち——ひとり親家族で育つ子どもたちの生活実態』明石書店。

遠藤久夫・野田正人・藤間公太 監修／国立社会保障・人口問題研究所 編

『児童相談所の役割と課題

——ケース記録から読み解く支援・連携・協働』

(東京大学出版会, 2020 年, A5 判, 216 頁, 4,400 円+税)

三谷はるよ

(龍谷大学社会学部准教授)

児童相談所への児童虐待相談対応件数が年々増加の一途をたどっている。虐待による死亡事件がメディアで大きく報じられるたびに、児童相談所の介入や他機関との連携は適切だったかなど、児童相談所は批判の矢面に立たされがちだ。

こうした情勢の中、本書は児童相談所が保管する児童虐待相談記録文書を学術的に分析することで、児童相談所の今日的課題にアプローチする意欲作である。従来、個人情報取り扱いの難しさや現場の多忙さを背景として、本記録文書が積極的に活用されることはなかった。国立社会保障・人口問題研究所は、国の試験研究機関の強みを生かし、このブラックボックスとよぶべき行政記録を研究データとする類まれなプロジェクトを遂行した。本書はその、『「一億総活躍社会」実現に向けた総合的研究』プロジェクトの成果物である。9つの児童相談所から提供された183件の匿名化データは、数こそ限定的だが、一般の人びとは目にするのができない、親子分離（施設措置および里親委託）や家庭復帰に至るケースの濃厚なリアリティに満ちている。また本書の執筆陣は、社会学、社会福祉学、教育学、経済学といった多様な学問的背景をもつ。それによって、統計分析（第2章）、csQCA（第3章）、社会問題のワーク（第5章）、ドキュメント分析（第7章）等から、多角的にアプローチされている点も特色といえよう。

本書は2部構成をとる。第I部では、児童相談所に求められる親子分離の機能が総論として議論された上で（第1章）、量的データによって親子分離の規定要因が